
不思議旅行

スペースラビット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議旅行

【Nコード】

N3949N

【作者名】

スペースラビット

【あらすじ】

不思議な体験は、何を伝えようとしたのか？ある日、突然起こった、不思議旅行。何処なのか？全くわからない。超短編、読み切り。

二十一世紀をむかえたばかりの頃。

私は、到底考えられない体験をした。

この物語が、どんなにファンタジーに充ち溢れようと、真実に変わりはない。

おそらく、誰も信じてくれないだろう。

初めに言っておくが、私は、あらゆる可能性から、客観的に物事を見なくてはならない、そう考えている。

あまりに突拍子の無い事は、信じる事が出来ない。皆、そうだと思う。

世間に沢山ある心霊体験だの、予言だの、

前世の記憶だの、不思議な話しは沢山ある。

専門家では無いが、脳が映しだす幻覚だったり、記憶の合成だったりするのではないか、そう思っている。

私は、何のとりえも無い、

普通の男だ。

映画のような事なんて、起こるはずは無いのだ。

事实は小説より奇なりと、よく言われるが、まさか、自分がその境遇に遭遇するとは、

月が爆発するって話しのほうが、まだ、真実味がある。

私の特別な「その日」は、突然訪れた。

なんの前触れもなく。当たり前前の、繰り返される毎日の中で。その日も、そんな日だった。

当時、私は二十代半ばで、マンションで一人暮らしをしていた。職場と家との往復の毎日。仕事なのか、アルバイトなのか、はつきりしない仕事だ。

お酒をつくり、笑顔で話しをする。

基本は、そうだ。何年も続けたおかげで、すっかりベテランになっていた。

仕事には、不満はなかった。

仕事帰り、寄り道する事もなく、

その日は帰った。朝の4時に仕事が終わわり、家に着くのは5時頃だった。

遅くなったりする事は、よくあったのだが、毎日じゃない。

仕事は、午後8時から始まる。

睡眠は、太陽が登っている時間帯って事だ。

その日、いつもの通り、仕事が終わわり、家に着き、シャワーを浴び、食事を取り、

テレビを見たりして、普段どりの日常を送っていた。何の異変も無い。

特別、変わった物を食べたり、

何か薬を飲んだり、

深酒をしたりしていない。

至って普通だ。

ベットに入り、本を読んだ。これは、癖だ。暫くして、眠くなったので、本を閉じた。

テレビは、タイマー設定で、つけたまま。

これも、癖だ。

そのまま、流れるテレビの音を聞きながら、目を閉じていた。

すると、突然、知らない所に立っていた。

なんの違和感もなく、突然だ。ビックリする暇もなかった。静かに突然だ。

瞬間移動をした感覚は無い。

気がついたら、いたって感じた。

どうやって、ここに来たのか、まったくわからなかった。しかし、疑問を感じていない。

屋外だ。時間も分からない。

どうやら、昼間ではないようだ。夕方頃か？

氷山のような物がある。寒さは感じ無い。

何か、人工的な温度調整エリアにいる。

なぜなら、氷山は寒そうだし、少し前に、

吹雪があつた痕跡が、その景色から見て取れる。

だが、私が立っている辺り一帯だけは、吹雪の痕跡が無い。

これは、何らかの温度調節が、人工的に行われているに違いない。

さらに、上下白の服を来ている。

着替えた記憶はない。不思議な事に、それらの事に関して、疑問を持たなかった。

何か、コントロールされているかのようなだ。

ここは、南極か北極だろうか？「極」の辺だと、それだけは、何故かわかった。

空には、星空が広がっていた。とても綺麗だ。・・見たかったんだ、星・・

などと、思っていた。思考能力がおかしくなっているのかも知れない、そんな感覚だ。

だが、はつきりと自我はあつた。

私は、子供の時から星が好きだった。

チャンスさえあれば、いい場所で、星を観察したいと、思っていた。だから、綺麗な夜空に満足していた。

他の人も、星が好きなんだろうか？好きだといいなと、思っていた。気がつけば、周りには、沢山の人がいる。

その辺は、道路のライトの様な物で照らされおり、真っ暗ではない。私は、ここにいる人達と、同じ目的があるようだった。

近くにいた黒人の男性は、もう何度も参加しているようで、慣れているようだった。

分からない事があつたら、気軽に聞いてくれと、話しかけてくれた。優しい人だ。

私は、外国語が話せる訳では無い。

なのに、話している内容は、わかる。

言葉の壁は、一切無いようだ。

これに、強い安心感を覚えた。その彼は、少なくとも、初めてではないので、いろいろわかっているんだろうと、思った。

人目につかないためには、こんな所に集まるのが、都合がいいんだと、考えていた。

さすがに、街中に集まる事は、出来ないのだろうと、考えていた。ここなら、おそらく、目撃される事もない。

なるほどと、納得していた。「何故」とか、「どうして」とかの疑問は、一切無い。

色んな事を考えるのだが、ただ、成り行きに任せている。

沢山の人がいたのだが、どうやら、少人数のグループに分かれるようだ。

私は、先程、話しかけてくれた彼と、同じグループで、3人か4人ほど。

はつきりとした人数は、わからない。

程良く、女性と男性がまじっており、皆物静かで、話し声は、ほとんどしない。

わずかに、聞こえるほどだ。ちようと、図書館のような感じで聞こえた。

気がつくと、人は随分減っており、多くの方は、どこかに移動したらしい。

いつの間に、いなくなったのか？

頻繁に夜空を見上げていた為に、気がつかなかったのだろうか。しかし、特に気になる事もなかった。

すると、彼が、こっちだと、手招きしている。どうやら、リーダー的存在らしい。

もしくは、添乗員なのかな？なんとなく、そんな風に見えた。

また、その人は、不思議な存在ではなく、同じ人間。特別、不思議な力があるとか、そんな事は無い。

案内されるまま進むと、小さな建物の様な物があつた。先程まで、この建物には、気がつかなかつた。

そんなに大きな建物ではない。

いや、建物より、小さなビルのような飛行物体が着陸しているって感じた。

それは、いくつもあつた。その中の一つに、案内されているのだ。ドアらしき物に進むには、5段ほどの階段を上り、進む。その建物の素材は、プラスチックのようでもあり、鉄やステンレスのようでもあつた。冷やかな印象だ。触ると、とてもめらかな材質だつた。

ドアは、開いていた。そのドアに、順番に入つていった。最後尾に、リーダー的役割である彼がいた。

私は、最後から二番目だ。

ゆっくりと、ドアの中に人が入つて行くのだが、その時、彼が、こんな事を言つた。

「何回やつても、慣れないんだよなー」

と、苦手風なジェスチャーを、誰に話す訳でもなく、やってみせた。その「何回やつても」が意味する事が、移動方法だと、私は察した。

だが、初めての私にたいして、熟練者である事のアピールだと、感じた。おそらく、私に聞こえるように、言つたのだ。

余裕を見せつけられているようだった。

私は、何が起こるのか、わからない。

ただ、ドアへと進む。不安な感情は無い。期待感なども無い。冷静そのもの。

だから、このドアの中に入ると、何が起こるとかは、考えていない。彼は、慣れているんだな、余裕なんだな、わざと見せつけなくてもいいのにと、

考えていた。それも、おかしい話だが。

そして、ついにそのドアへと入った。

すると、何が起こったのか、まったくわからない。気がつく、何やら、森のような所に来ていた。

その森には、人工的な物が無い。道も無い。そこには、獣道のように、自然に出来た道らしき物があった。

周りをよく見ると、植物に違和感があった。

大きな木々は、そうは変わらない。

よく知っているような木だ。

だが、初めて見るような植物が沢山ある。

大きな葉っぱが、直接、地面から生え、葉の先端に、赤い小さな実をつけていたり、

図鑑で見た、白亜紀に存在していたような植物が、ところ狭しと生えている。

そして、隙間をつめるように、苔のような物が、びっしりと生えている。

まさに、緑におおわれた所だ。

山菜のような植物も多いのだが、

その巨大さと言ったら、驚くばかりだ。

特に注目したのは、巨大なゼンマイのような植物。よく知っているゼンマイとは違う。

くるくると巻いている部分には、隙間が空いており、等間隔に透明な、小さな、

水滴のような物が、葉の両側に付いている。

じつに美しい。そして、巨大だ。私と、同じ位の背丈があるだろうか。肉厚だ。

不思議なのは、花を見かけない。

季節じゃないのか、ここには、花が咲く植物が無いのか、それはわからない。

この森は、とても涼しい。そして、虫や鳥などの生き物がいない。

まさに、植物だけで構成されている世界だ。

私は、顕微鏡なんかで調べたら、微生物がいるのかなと、考えていた。

それほど、私達以外の生き物がいない。

安心して、寝っ転がれると、のんきな事を考えていた。

ここが、何処なのか？

何故？ここにいるのか？

そんな事は、考えていなかった。

しばらくして、私は、ここは、地球ではないと、理解していた。

しかも、この惑星の赤道からは、随分と離れた所であると、感じていた。

何故？わかったのか？

自然と、そう理解した。

この惑星の、赤道付近にいけば、また、違う自然があるのだろうか
と、考えていた。

気がつくと、私と彼だけになっていた。

どうやら、一人一人に、ナビゲーターが付いているらしい。他の人は、居ない。

どこか、別の所に行ったのか？

ただ、少なくとも、この惑星にいるだろう。

あのドアに入った人は、ここに来ているはずだと、考えていた。

彼とは、直接話していない。

ただ、ずっとそばにいる。会話をしていないにもかかわらず、多くの情報交換をしている事に気がついた。

だが、今までと同じように、疑問に感じる事はない。

彼の肉声を聞いたのは、あの、ドアに入る前に聞いた、その声だけだった。

そして、名前も知らない。

わかっているのは、黒人男性で、宇宙人とかではなく、ちゃんと地球人であり、何度も、ここを訪れている、とゆうことだ。

それ以外は、まったくわからない。

しばらくして、彼は、一軒の家に案内してくれた。

その深い森のなかに、木々や植物に囲まれるように、一軒の家があった。

その家は、木造の作りだ。ちょうど、雪山のロッジのような感じが、大きい。

派手な色など使わないで、素材の色が、その建物の色だ。ネジや釘なども、無い。

すべて、パズルのように組み立ててあるような感じだ。

目的が、やっと、はつきりした。

私は、この家を訪ねて来たのだ。

その家の持ち主は、元、地球人だと、わかっていた。

不思議な感覚だが、全ての事に関して、わからない事でも、何故か、だんだん思い出してくるような、前から知っていたような感覚で、

いろいろな事が、わかって来る。

そして、理解出来て行く。

不思議だが、とても心地いい感じを覚える。

もしかして、これが、意識の共有なのか？

などと考えていたのだが、同時に、地球人には、まだ早いのではないか？

などと、感じていた。

言葉で説明されなくても、こんな感じで、理解していく。おそらく、私に入ってくる、

この言葉を超えた理解と、説明は、

彼の記憶や考えを、共有しているのかもしれないと、感じていた。

だとしたら、私の考えている事も、

彼に筒抜けだと、ゆうことだ。

恥ずかしさは、感じなかった。

ただ、不思議な感じに、情報量としては、当然ながら、彼のほうが多いので、

こちらから漏れる感情や情報なんて、大した事がないと、圧倒されているような、感覚があった。

私は、全世界の人が、こんな風に、意識を共有できたら、戦争なんて起きないのに、

と、思ったのだが、瞬間に、まだ無理だと、考えていた。この感覚は、説明するのに、

言葉がいらぬ。自然とわかって行く。

だから、時間がかからない。

じつに、便利だが、プライバシーはどうするのだろうか。

科学や、文明が進めば、プライバシーなど超越するのだろうか。

それとも、共有する意識情報も、限定的に出来るのだろうか？

また、近くにいる人同士の感覚らしいと、わかった。

あまり離れると、この意識の共有は出来ないようだ。

私は、もし、惑星とか、星とか、植物とかとも、意識の共有が出来るのなら、何がわかるのだろうか、考えていた。

そんな所まで、まだまだだ、と、理解したし、彼にも、無理だとわかった。

私達は、その家に入ってしまった。

すると、女性がいた。白人女性だ。中年位だろうか。その人が、この家の所有者だとわかった。

ここに、住んでいるのだ。

この女性、元地球人で、望んで、地球を出て来た事がわかったと同時に、私をみて、

懐かしさと、ほんの少しの、地球を離れた事を後悔する気持ちが伝わってきた。

外からみたら、自然に溶け込んでいるような感じの、木の家だったのだが、中は近代的でウッド風のおしゃれな家だった。

だが、機械にあふれる印象はない。

木で作られた家具がある。タンスらしき物、テーブルなど、普通だ。テレビの様な物は、何処にも見当たらない。

だが、高度な家電が沢山あると、理解した。何処にあるのか、非常に分かりにくい。

それだけ、コンパクトな機械だ。

声に反応するのか、どうなのか？

それは、分からなかった。

私の知る限りでは、雑誌などで見る、プロが配置をした、モデルルームのようだ。

テレビなどは、おそらく、見る人の所に、浮かび上がるのだろう。ちいさな、ライターほどの装置が二つ。間を空けて置くと、その上には、テレビ画面のように、ディスプレイが浮かび上がる。

画面の大きさは、その、装置の設置の置く幅を、広げてやればいい。小さくも、巨大なスクリーンにもなる。

装置の色さえ合わせれば、なにも無いように見える。スピーカーらしき物は、ない。

だが、素晴らしい音がでる。部屋のどこから鳴っているのか分からない。

なにもかもが、溶け込んでいる。

その家の主人の彼女が、食事をご馳走してくれる事になった。そして、様々な質問に答えてくれる事にもなった。

食卓に案内されたのだが、椅子が少々変わった形をしていた。

背もたれの部分が、とても大きいのだ。

そこにある椅子全てがそうだ。

食卓の椅子は、木の皮のような物を、編んで作ったような椅子だ。そして、その背もたれが大きい。2メートル以上あるだろうか。

また、他の椅子も見ただが、デザインが違う椅子でも、背もたれは大きい。座るところは、標準的な大きさだった。

座高がすごく高い人でも、いるのだろうか？そんな事を、考えていた。

しばらくして、食事が運ばれてきた。

その食事は、野菜が中心のような感じで、肉類は、入っていないようだ。

木の実やら、葉物、つくしのような物や、ゼンマイを切ったような感じの料理で、煮込み料理だ。私は、食べれるのかな？と、失礼ながら思ったのですが、彼女も、彼も、地球人で、食べているので大丈夫だと、思った。

食べてみると、美味しい感じはしない。

とても薄味だった。素材の味のみって感じの味だった。まさに、味付けをあまりしていない、煮込み料理って感じがした。

私は、そんな事を思った時、もしかしたら、私の感想はバレているかもしれないと、思ったのだが、表情や仕草で、美味しいと、表現してみせていた。

食事が終わると、私は、いろいろ聞きたい事があった。

そして、訪ねてみるのだが、意識の共有で、情報は入ってくるのだが、私の質問は、相手に伝わらない。

なので、私からの質問は、口でしゃべって聞いた。

食事中に、私は、ここは田舎ではなく、とんでもない大都会だと、知ったのだが、何処が大都会なのか、信じられなかった。

こんな、森の中で、隣近所はない。まるで、世捨て人の生活のように感じていたのだ。

だから、ここが大都会である事が、納得できなかった。それに、仕事とかどうなんだろうと、疑問に思っていた。

その事を、質問してみた。すると、彼女は微笑んで、家の近くにある湖に案内してくれた。家から、歩いて直ぐだった。

そして、その湖をご覧なさいって、合図されたので、覗き込んでみた。

すると、どうだろう。その湖は、まさに、巨大で深く、近代的な大都市が広がっていたのだ。これが、湖？と、疑いたくなる大きなのだが、覗き込まなければ、地球で見るような、普通の湖だ。

だが、その中には、巨大な大都市が広がり、様々な明かりが灯っていた。また、移動しているような、見たことの無い車のような物や、飛行機だろうか？それとも、空飛ぶ円盤のような物だろうか？

沢山飛んでいた。その乗り物は、スケルトンタイプが多い。かなり高速で動いても、振り落とされる事は、無いようだ。

高層ビルが、遠く視界の限界まで、途切れる事なく、続いている。こんな大都市は、見た事が無い。ほんとに、水の中に、その大都市があるのか、不思議だった。いったい、どれほどの人が、そこに居るのだろうか。

それだけの大都市が、まさに、眼下に広がっているのだが、音が全くしない。

とても、静かなままだ。

じっと見つめたまま、動けなくなった。

まさに、映画の世界に迷い込んだ気分だ。

私は、水の中に、こんな大都市を作って、

よく、この水の透明度を保っていると、関心していた。

もしかしたら、水は、表面的にあるだけで、その下に広がる大都市は、地下空間なのかも知れない。

この湖は、入り口か、何か、遠くへ転送する所なのかもしれない、思った。

あくまで、大自然の中に、住んでいるため、機械的な入り口ではなく、自然に溶けこむように、カモフラージュしているのかも知れない。そう思った。

すると、意識の共有の、あの感覚が、襲ってきた。ここでは、仕事をすると、生活をする所が、完全に分かれている。

そして、一人一人に、自然と住む家があり、隣の家との距離は、ちゃんと決められている。

ここが、大都会なのは、このような家が、沢山建設されている地域だから。物凄く沢山の人口が集まっている地域だ。

だが、私の感覚でいったら、森の中に、家が一つだけ。世捨て人の

ような生活にみえたのだが、生活する上で、自然が与えられるのは当然の事で、不思議では無いと、分かった。

隣の家まで、どのくらい離れているのだろうと、思っていた。怪我をしたらどうするのだろうか？

病気になったら、どうするのだろうか？そう、疑問に思ったのだが、科学がここまで発達しているので、その位、解決済みなんだなって勝手に想像した。

彼女と、彼は、どんな知り合いなんだろうって、思ったのですが、あまりに、沢山の事を見て、そんな事、どうでもよくなった。

ただ、何で、地球を離れて、ここで暮らしているのか？訪ねても、答えてくれなかった。

ただ、彼女は微笑んでいるだけだ。しかし、わずかに伝わってくる私が、このまま地球に帰る事を、少し、羨ましく思っている事。そんなに、強い感じではないのだが、もう一度、地球に行きたい、そう、思っているようだ。

一度離れると、帰ることは、出来ないのだろうか。

それとも、ここにとどまる理由があるのだろうか。それは、分からなかった。

ただ、少し悲しげに見えた。地球に旅行で来たらいいのに、そんな事を考えたが、私には、何も言えなかった。

そして、ついに帰る時が近づいているのが分かった。だんだん、意識の共有に慣れてきたようだ。この人は、ホントにしゃべらない。この三人は、地球人だ。でも、実際喋っているのは、私だけだ。

この意識の共有は、心が丸見えて事ではないらしい。アクセス可能な領域が存在し、閉じる事も、開く事も可能だとわかった。

また、会話も可能なのだが、意識のボールを投げるみたいな感じで、行っている。

よって、瞬時に伝わるのだ。

わたしには、まだまだ、訓練が必要だと感じた。今は、投げてください意識を、キャッチする事が、ほんの少し、出来るようになった程

度だ。

どの位の時間を、ここで過ごしたのか、まったく分からない。しかし、長時間であったようにも感じたし、数時間程度だったような感じもする。とにかく、離れる時が来た。

私は、そのガイドの彼と、彼女にお別れを言って、森の中の道を進んでいった。

名残り惜しい態度は無い。実に、あっさりと別れた。私は、彼について行くしか無い。

すると、今度は、建物に入ったりすること無く、自然と、初めに出發した所に、戻っていた。

恐らく、植物のような物に、カモフラージュしていたのかもしれない。

出口は、建物出はなかった。どうやら、送る時だけ、この建物のような物が、必要なのかもしれない。

沢山の人も、戻ってきているようだ。

みんな、それぞれ、どこかに行ってきたのだろう。ここが、もう、地球だと分かった。

そして、彼が、言った。

「どうせ、皆、忘れちゃうんだけどね」

はつきりと聞こえた。

同時に、忘れたにしても、何かしらの、精神的な痕跡は残る事が分かった。

何故こんな事をしているのだろうか。

人類の精神の進化でもしているのだろうか？何故、私は参加しているのだろうか？

分からない。でも、彼が言うように、忘れてしまうのは嫌だと、強く思った。

気づくと、自分の部屋にいた。すると、記憶が、かすかに残っていた。

私は、急いで、忘れないように、メモをとった。

ところが、メモをとっている最中から、
どんどん記憶が消えていく。急いで、がんばって思い出して、メモ
を書いていた。
それでも、多くの部分を忘れてしまった。
今日、ここに書いたのは、メモを頼りに、
また、わずかに残っている記憶を辿り、
書いたものだ。

何故、こんな事が起こっているのか？

他にいた人達も、何か関係あるのだろうか？こんな話しは、誰も信
じてくれないだろう。

でも、私はここに記す。忘れないように。また、再び、あの星に行
けるだろうか？

行けるものなら、是非行きたい。

あの美しい自然の中を、もう一度、歩いてみたい。私は、何故、ほ
んの少しの記憶が残っていたのだろうか？

それは、謎だ。

そして、何事も無かったように、
当たり前の毎日が、訪れたのだ。

じつは、一番覚えているのが、この体験なのだ。その後、何度か
あったようだ。

それは、あまり良く覚えていない。

断片的な記憶が、残っているだけだ。

どうやら、再び何処かへ行ったようで、

前回とは違うナビゲーターが、案内してくれたようだ。女性だった。
それは、はっきりと覚えている。珍しい自然現象を見にいった。そ
の光景だけは、覚えている。

そして、彼女の説明によると、この現象は、とんでもなく珍しいの
で、いろんな所から見に来る。

次見られるのは、ずっと先の事になると、
説明された。

その自然現象とは、夜空に昼と夜が同時に存在する光景だ。空は、昼間の空なのだが、

そこに、細長く横切る「夜」の帯がある。

真上にその夜が、見えるのだが、そこ以外、昼間の空なのだ。

私は、その「夜」と「昼」の境界線を、

じつと観察した。すると、夕方のような感じになっている。夜空から夕焼けの様な薄い、赤かピンクの色にグラデーションの様になっている。その、夕焼けは、夜の帯の両側に、細い線の様に続いている。

信じられない位、綺麗だった。

その夜の帯の部分だが、ちゃんと星も見えていた。また、わずかに赤みがあった、銀河か何かが、他の星よりも、確実に大きく一つ見えていた。私は、あの銀河の様な物は、わりと、ここから距離が近いんだって、思った。

星は、またたいていたので、大気があるんだなって、考えていたのだが、呼吸出来ているので、当たり前だなって、思ったりした。

その不思議で素晴らしい空は、普通の住宅街の様な所で見られる。

私達は、道路の様な所から、それを眺めた。

すると、地元の人って感じの人が、自宅から出てきて、やはり、空を眺めていた。

どんな建物だったのか、思い出せない。

どんな女性ナビゲーターだったのか、思い出せない。だが、あの素晴らしい不思議な空だけは、はっきり覚えている。

どうやって帰ってきたのか、どうやって行ったのか、前回の様に覚えていない。

ただ、すばらしい夜空を思い出すと、

絵の才能があつたら、描くのになと、思ってしまう。

何故、こんな体験をするのか、どうして、忘れてしまうのか。それが、夢でないと、

何故思うのか。わからない。

私は、そんな記憶があるにもかかわらず、非科学的な物は、あまり信じない。

しかし、あの不思議旅行だけは、信じるも信じないも、無い。事実だからだ。

非科学的な事とは思わない。

もしかしたら、ほかの人で、あの不思議で素晴らしい空を、見たことある人が、いるかも知れない。

もしいたら、ぜひ、話してみたいものだ。

私は、また、不思議な旅行に行きたいと、思っている。

もしかしたら、何度も行ってるのかもしれない。覚えてないだけで。

今度、何時、不思議旅行にいけるのだろうか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3949n/>

不思議旅行

2010年10月9日23時23分発行